地域の特色を生かした造形コラボレーションの実践的研究

－美濃市での路上ワークショップ－

A Practical Study of Art Collaborations Make Use of the Characteristics in the Region

－The Workshops on the Street in Mino City－

辻　　泰秀
TSUJI Yasuhide

１．はじめに

近年，美術館教育をはじめとした様々な分野で，ワークショップという言葉を頻繁に使用するようになった[1)]。たとえば，社会教育の参加者募集で「子どもワークショップ」というタイトルを示しただけで，ワークショップって何ですか，どんな活動をするのですかといった問い合わせは取り立ててなく，参加希望が集まる。この場合には､ワークショップは「みんなで楽しくものづくりの活動をしながら交流をする」といった内容で理解されている[2)]。

造形表現は個性を発揮するものであるから，これまでは一人だけで黙々と制作することに重点が置かれがちであった。もちろん，造形表現を通して自分を見つめたり心情を表出する経験は貴重である。けれども，造形表現の魅力には，いろいろな人達と一緒になって発想や工夫した内容を交流したり，協力して創り上げていくことがあるはずである。自分の発想を周囲の人達に伝えることでより一層考えが深まったり，人々からの助言や支援に触発されて可能性が広がる場合がある。そのため，完成された作品を評価することに加えて，創作過程における取り組みや交流を大切にする。そのようなものづくりにかかわるワークショップでの交流や協力を造形コラボレーションとして，実践の在り方を探っていく。

造形ワークショップのうち，地域の特色を生かした実践に着目する。日本の各地には人々が培ってきた独自の文化・伝統・自然があるはずであるが，子どもたちは身近な地域のよさを知らないまま過ごしていることが多い。美術は本来その土地の文化や生活と密接に結び付いている。そこで，子どもたちや地域の人々が共に造形活動を通して交流する中で，その地域のもつよさを体感できればすばらしい。ここでは，筆者が企画や運営をした実践事例として，岐阜県美濃市でのワークショップを取り上げる。美濃市は「美濃和紙」で有名で，うだつの上がる古い町並みが残っている[3)]。長良川や板取川の清流，季節の移り変わりを感受できる山々など自然環境にも恵まれている。そのような特色を生かした実践にしていきたいと考える。

２．美濃市の特色

造形教育を行っていく上で，美濃市の特色となるものはどのようなものであろうか。そのキーワードとして「和紙」「うだつの上がる町並み」「アーティスト・イン・レジデンス」の三点を指摘する。

（１）和紙

美濃市は古くから和紙の産地として知られている[4)]。職人の数は減少しているが，現在でも伝統的

な工程で和紙がつくられている。手漉き和紙は，木を蒸す・皮をはぐ・川にさらす・皮を煮る（煮熟）・アクを抜く・塵をとる・木づちで叩く（叩解）・紙を漉く・紙を絞る・乾かす・裁断するといった多くの過程を経る。地区や職人によって材料や漉き方が微妙に異なるが，和紙ならではの柔らかさや優しさといった魅力をそれぞれもっている。美濃和紙は「流し漉き」といって，桁（ケタ）をタテ・ヨコに揺り動かしながら液を流して漉く方法をとる。薄くても丈夫な紙になるため，美術工芸品やあかりの素材として重宝されている。

美濃市の子どもたちは，総合学習の時間などで紙漉きの体験を行い，自分で漉いた紙の卒業証書を受け取る。美濃市立上牧小学校には紙漉きの工房があり，地域に住む４名の職人の方が交代で紙漉きの指導にあたっている。子どもたちは，楮（こうぞ）の木から紙ができる工程を知り，和紙をつくる上での工夫や苦労を体験的に理解する。

このように美濃市の子どもたちと和紙とはかかわりが深い。ただし，子どもたちの内心は気軽ではない。手漉き和紙の工程や技法は，長年にわたる熟練によって身につけるもので，師弟の関係の中で伝えられてきた。基本の型を学ぶにしても真剣さや根気強さを求められ，遊び心で始めるとお叱りを受けるかもしれない。かっては多くの家庭で紙漉きをしていたが，現実として紙漉きを職業にして受け継ぐ者はほとんどいない。そのような状況の下，将来どのような道に進んでも紙漉きをしたり和紙を使って工作をした体験を覚えていてもらいたいと考える。

（２）うだつの上がる町並み

上有知，現在の美濃市は和紙の取引を中心にして江戸時代に発展した。現在でも，当時の面影を示す古い町並みが残っており，国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。旧今井家や小坂家住宅は，国の重要文化財にも指定されている。卯建（うだつ）と呼ばれる装飾的な瓦を取り付けており，「うだつの上がる町並み」として知られている。うだつは当初は防火壁の役割であったが，これが経済的な力のシンボルにもなった。水琴窟・格子などからも文化の趣を感じることができる。

近年の都市化の中で古い町並みは全国的に消えていったが，美濃市では電線を地中に埋めるなど，できるだけ当時の景観を保存しようとしてきた。伝統的な花みこし・山車・仁輪加（にわか）などが行われる美濃祭り，民家を活用した「町家回廊（町並み美術館）」，和紙と町並みの雰囲気を生かした「あかりアート展」など古い町並みのよさを取り入れたイベントが実施されている。若い世代は都会的な感覚や新しいものを追い求めようとしがちであるが，機会を通して長い間育まれてきた伝統のすばらしさや温故知新にあたるものに触れることが必要である。古い町並みや建物などの器だけが残されているのではなく，人々が日常的に暮らしていたり，子どもたちの姿を町のあちこちで見ることができる状態を今後も保ち続けることが望まれる。

（３）アーティスト・イン・レジデンス

そこに住む人々の心の豊かさがあるからこそ，古い町並みや文化が大切にされている。そのような心の豊かさを基盤にして，美濃市では10年間近く「美濃・紙の芸術村」という名称でアーティスト・イン・レジデンス事業に取り組んでいる[5)]。平成９年度から５年間にわたって文化庁の補助を受けて実施し，14年度からは市の単独事業として継続している。

「『アーティスト・イン・レジデンス』は，アーティストが異なる文化や国に身を置き，他のアーティストとの交流から刺激を受けながら創作活動に取り組む場を提供する，交流活動として現代アート分野を中心に国内外で広がっています。『美濃・紙の芸術村』の特徴は，1300年もの歴史を有する伝統工芸『美濃和紙』を素材としている点，市民を中心に組織された実行委員会やボランティアが，３ケ月滞在する外国人アーティストのホームステイ受入や通訳，ニューズレターによる広報活動，市内小中学校における子ども達とのワークショップ実施，紙漉き体験，作品発表などを企画運営し，アーティストの制作活動を支え，国際交流の輪を広げている点にあります。美濃和紙のすばらしさに触れ，帰国後も和紙を素材とする作品制作に意欲を見せる海外アーティストを市民の創意工夫で育む一方で，

異なる文化的背景をもつアーティスト達が発揮する伝統工芸の枠にとらわれない自由な発想に触れ，新たな活力を得ています。[6)]」という。

毎年，５～６名のアーティストを招聘し，平成９年から17年までに９年間で25ケ国53名（内男性17名・女性36名，内外国人47名・日本人６名）が９月から12月に美濃市に滞在している。アーティストは地域ボランティアの支援を得て制作活動・国際交流・教育活動に意欲的に取り組む。子どもたちを対象にした造形ワークショップの実践を重視するのは美濃市の特徴であり，ものづくりの教育活動を通して子どもたちとアーティストとの交流をさらに深めていくことを継続・発展させるつもりである。

３．路上でのコラボレーション１　－「あかりの道」－

うだつの上がる町並みにおいて子どもたちが紙を使ったいろいろな造形活動をしようということで，岐阜大学と美濃市文化会館が連携をとって平成13（2001）年８月に「美濃紙ワークショップ」の１回目を開催した。10月に２回目を行い，その午後のプログラムの中でアーティストであり美術教育者でもある磯部錦司[7)]を中心に路上でのコラボレーションを行った。美濃市では毎年10月に「あかりアート展」を開催し，和紙でつくったあかりのオブジェを道沿いに展示する。昼に子どもたちのワークショップが行われ夕方から「あかりアート展」が開催されることから，磯部が「あかりの道」と名称をつけた。「あかりアート展」には全国から多数の作品が寄せられ，この日には観光や見学の人で町並みは賑わう。

以前に小学校の体育館で大きな画面にアーティストと子どもたちが協力して描くことを辻と磯部が企画した[8)]。子どもたちは全身を使って，思いっきり描く行為に取り組んだ。今回の美濃市での実践では，それにいくつかの要素を加えた。まず体育館という仕切られた空間から路上へと場所を移した。体育館は広いといっても，やはり壁や屋根に仕切られた空間である。町並みは屋外であり奥行きも広がっており，開放的な雰囲気にひたることができる。うだつの上がる町並みは趣のある古い町並みであり，生活感，和みや癒しといったものをもたらしてくれる。

また，コラボレーションに集う人々にも広がりがあった。前回は附属小学校の６年生１クラス，２人のアーティスト，大学教員と学生スタッフ，学級担任が参加したが，特定の小学校の一つ学級での実践である。今回は町並みでのワークショップということであり，参加する子どもたちの学校・学年・学級は様々であり，美濃市やその周辺から希望者が集まっている。アーティスト・イン・レジデンス事業で滞在している海外アーティスト６名が加わり，スタッフも岐阜大学・愛知教育大学・岐阜市立女子短期大学の教員や学生，学校の教職員，市の職員など多様である。子どもたち，アーティスト，支援スタッフ，地域の人々，観光客などが町並みで出会い，一緒に造形表現をする中で交流をしていくといった趣旨である。

この日は「あかりアート展」の実施のため町並み全体が車両通行止め（歩行者天国）の状態になるので，古川工房のある常盤町に栽培用の黒色のビニールシートを地面に敷き，その上に1.5m程の幅のロール和紙を広げて，それぞれをガムテープでとめた。路上に幅1.5m長さ150m程の大きな画面が現れる。絵の具は染色用の染め粉を水で溶かしたものや大きなチューブのポスターカラーを薄めたものをコップに分けて，各自が好みの色を手に取ることができようにした。ポスターカラーの方が色の種類が多く，和紙に馴染むという点では染料の方がすぐれている。刷毛や筆も参加者が複数使用できるように準備した。

この年のアーティストはポルスカ（フランス・女性），クリシー・ヒューガン（イギリス・女性）・篠原猛史（日本，海外で制作活動），マルタ・ポジック（ポーランド・女性），クリスティーナ・レナード（クロアチア・女性），ポリス・シェモフ（マケドニア・男性）であり，作風・国・性別・年代は多様である。美濃市での滞在中は，共同で制作や生活をしながら造形表現においては独自の作風・個

性が発揮されていた。

子どもたち・アーティストたち・学生スタッフ・地域ボランティアなどを会場に集めファシリテーター（進行役）の磯部から活動の説明がなされた。

「はじめにアーティストたちで描いてみたい。そのねらいは，描く行為を子どもたちに見せたい。子どたちの造形の遊びとして展開していくけれども，そこに出来事として，ここに私たちが何かきっかけをつくる。アーティストのみなさんも一生懸命に描きます。そのテーマは，この時間と空気と空間です。アートによって全てを融合してみたい。やってみないとどうなるかわからないけど頑張ってやってみたい。」「まずアーティストでコラボレーションしてみたいと思います。この空気と空間と時間をそれぞれが感じて，この前でアートを起こしたいと思います。本当に真剣にやります。その後に，いて下さる方々や子どもたちみんなで広げて紙いっぱい使いながらやってみる。ここを一つの中核にして次第に広げていくという行為をやってみたい。」

美濃市の「時間と空気と空間」を表しアートによって融合してみるというテーマは，子どもたちにとって答えのないような難題であり，アーティストも一瞬立ち止まるかもしれない。時間や空気はそこにあっても実際には目に見ることができない。見えないものを見えるかたちで描いていくというのは，実際には大変そうである。ただし，普段やったことのないようなテーマをみんなでやってみるということに興味が引かれるのも確かである。

海外のアーティストは美濃市での滞在にもなれ，明るい性格の人達だったので，磯部の提案に快く応じた。アーティストたちは，路上に広げられた和紙に間隔をおいて行為を始めた。磯部は毛筆に黒色の染料をつけてしたたらせた。海外アーティストは，長い棒に筆をつけて大きく線を描く，丸や螺旋状の形を次々に描く，ひざをついて樹木などの心象風景を描く，といった具合にさまざまな表現の内容や方法でアプローチをしようとした。アーティストたちは心の中に浮かぶイメージを造形的に表現することをしばしば経験しており，100号以上の大作を描くことも多いので，それぞれの方法で積極的に表現しようとしていた。

図１．ファシリテーターが子どもやアーティストに呼びかける。

図２．アーティストたちが長い画面に描き，子どもたちが鑑賞をする。

子どもたちや地域の人々は和紙の両サイドからアーティストが何をどのように描くのかを興味深く見つめていた。美術館で完成した作品を鑑賞する機会はあるが，海外のアーティストたちが目の前で描いている光景を見つめるのは，参加者にとって貴重である。多くの人々が見つめる中でダイナミックに描いていくという活動は，アーティストたちの創作意欲を引き出しているようであった。

アーティストによる表現活動と参加者による鑑賞活動が展開された後，子どもたちも描くことに加わっていった。150メートの画面の広がりがあるので，子どもたちや学生スタッフは，余白のところ

に分かれて描きはじめた。アーティストは黒・紺など濃い色合いであったが，子どもたちが選択する色は黄・オレンジ・赤など明るい色合いの色が多い。思い思いに刷毛を動かして画面に線をしるす子，絵の具をしたたらせながら偶然にできるにじみの効果を出そうとしている子など様々な表現の仕方が出てきた。

図３．子どもたちも思い思いに表現する。
描いたりドリッピングをする。

図４．アーティストと子どもが交わる。
同じ画面の中で共に活動をする。

ワークショップをしている子どもたちに加えて，中学生・地域の人々・たまたま通りかかった観光客や見学の人などが次々と参加した。その場で誘われたり，おもしろそうだからやってみようということで，気軽に活動に入っていった。一つの画面に初対面の多様な人が加わるというのが，この造形コラボレーションの特徴である。

時間・空間・空気を表すという当初のテーマはいくぶん難解であったかもしれないが，要するに大きな画面をみんなで自由に描いてうめていくといった方向で進んでいった。白い画面がしだいに絵の具で描かれていくにつれて，表現者相互のかかわりがでてきた。大きな余白に一人で描いているときは周りは意識しないが，隣り合う色やかたちがある場合には，周りとの関係を工夫するようになる。前に描いてあったアーティストや友達の表現をつなげて描いていく，引き立つように異なる色や形を重ねて描く，前に描いてあったものを大切にして少しでも余白を見つけて描く，といったようにそれぞれのアプローチが見られた。

普段子どもたちが描いている画用紙は，所定のサイズや枠で切り取られ個々に描いているので，描く人同士のかかわりや重なりといったものが直接にはない。既に描かれたものをもとにしてどのようにつなぐのか，重ね合わせていくのかといったことは，コラボレーション特有の要素である。また，和紙は画用紙に比べて絵の具を吸い込むのでしたたりや筆づかいの効果を出しやすい。

描き始めて時間が経過してくると，部分的に見て何を描いているのかといった見方から全体を通した見方へと変化してくる。町並みに沿った画面全体を見渡して，色合いや筆づかいを比較する見方になる。コップの絵の具を直接したたらせたり，絵の具を手につけてスタンピングをしたりする大胆な方法も出てきた。アーティストの篠原は裸足になって和紙の上を歩きながらあちこちに足跡をつけ，ポルスカ（フランス）は着用している服にもペインティングをした。

共同で描く活動（コラボレーション）が十分に行われたところで，「自分の一番好きな場所を見つけて，そこでちょっと立ち止まってみましょうか」「描くことから全体を歩きながら見てみましょう」という呼びかけが磯部から行われた。自分が描いていたところだけではなく全体を鑑賞する，偶然にできた色や形から自分なりの発見をする，といったねらいがある。

図５．大学生や地域の人々も加わる
町並み全体がアートの場になる。

図６．さまざまな色の重なりやにじみが
生じてくる。全体を見渡す。

４．路上でのコラボレーション２　－和紙を染めて町並みをかざる－

上記の活動では，１枚の大きな画面に描いていく活動が行われたが，次に，それぞれに染めた和紙を町並みの軒下に並べて吊るしていく活動について報告する。和紙を色で染めることは，美濃市内の学校で毎年のように行われている。けれども，染め方を工夫する活動そのものに着目した実践は珍しい。紙を材料にしたみこしやはっぴづくりなどが学校行事の中に位置づけられていて，それに使う材料確保のために和紙に色を染めることが多い。特定の一色で染めたり・枚数を多く染めることに関心がいく。

今回の実践では，紙の折り方や色の染み込ませ方を工夫することで，様々な表現が生まれることを経験する。これまでは機械的に床や手すりに並べるだけだったのに対して，今回の活動を通して一枚一枚の色や模様の美しさを意識することになる。

図７．染める方法を子どもたちに伝える。

図８．町並みの一角が染めた和紙で変わる。

（第２回　美濃紙ワークショップの「染め」のコーナー）

和紙の染め方を工夫して模様をつくるというワークショップは「第２回　美濃紙ワークショップ」の染めのコーナーでの実践が始まりである。愛知教育大学の工芸（樋口一成助教授）の研究室の学生スタッフが，和紙を折りたたんで染める方法で実践をした。紙を丁寧に折りその端を染料につけてから紙を広げると，繰り返しの模様が生まれる。少し折り方を変えたり，染める色や場所を変えると，模様も変化する。紙を広げたときに初めてどのような模様になるのかがわかるので意外性がある。このワークショップでは，いくつかのコーナーを設けたが，染めのコーナーが一番希望者が多かった。美しい模様になることや，学校での経験があまりないからであろう。

このときは４つのコーナーの一つでしかなかったが，軒下に麻ひもを縦横に張って，それに染めた和紙を吊るして並べていくと，町の一角が色で飾られてとても美しい光景になっていた。そこで，ワークショップの参加者全員が染めを体験したり，町並み全体に色の和紙を並べて飾ることはできないかと考えた。

ちょうどアーティスト・イン・レジデンスのアトリエにあたる吉田工房がうだつの上がる町並みの中にあり，この年のアーティストたちも滞在して一ケ月近く経過し慣れてきた時期になっていたので，《和紙を染める活動》《うだつの上がる町並みでのワークショップ》《レジデンスのアーティストの参加》といった美濃市ならではの内容を組み合わせて実践することにした。町並みにそって50メートルほどの長さの家の承諾を得て，軒下に和紙を吊るして並べることができるように紐を取り付けた。

平成15年９月23日（祝）に「第４回　美濃紙のワークショップ」をするということで，学校を通して参加者を募ったところ，50名近くの小学生の参加を得た。当日は，吉田工房を受付・集合場所にして，中庭を使ってオリエンテーションをすることにした。アトリエとして使用しているといっても，学校や公民館とは異なり，設備・材料・用具といった面での不都合はある。ただし，美濃市の古い町並みのもつ特有の雰囲気があり，そうした町並みの中で子どもたちが多数活動することで，少しでも活気をもたせることができればと考える。

このワークショップの全体のコーディネーター（企画・運営）を辻，染めのファシリテーター（進行役）を家田（当時，美濃小学校教諭），支援スタッフを岐阜大学の美術教育講座と生涯教育課程の学生20名程が担当する。参加したアーティストは，小泉まり子（フランス在住・女性），ヤエル・メール（イスラエル・女性），ジム・ノーブル（イギリス・男性），サンディー・オッペンハイマー（アメリカ合衆国・女性），エバ・ロシェック・ブシュコ（ポーランド・女性）の５名である。（文末の資料１を参照。）

家田の子どもたちへの説明は，次のようである。

「色を染めるのは，どんな方法でやってもよいけれども，昔からある方法をちょっと紹介して，後はみんなが工夫してやってくれたらよいと思います。紙はそのままぽんと絵の具（染料）につければ染まります。でもそれだけではおもしろくないので，いろいろな模様ができるようにします。模様は，和紙の白さと染め粉で染まった色の単純に２種類ができます。どうやったら白い部分と染め粉の色のついた部分ができるか，どうしたら和紙の白さを残したまま染めることができるかという，残し方を紹介します。」

「和紙は非常に表面がぴしっとしています。少し染まりやすくするためによくもんであげます。ただし，大切なものなのでしわをつけてそのまま捨てたらいけません。もまなくても染まるけれどもよくもんだ方が染まりやすい。簡単できれいなのは，ていねいに折ってやる。折り方は自由です。自分で工夫して下さい。折って紙の端を染め粉の液につけてあげる。そして，また違う端を別の染め粉液の液につけてあげる。同じ色でもいいです。このように折った角を染める方法を折り染めといいます。この折り染めのときは，もんでしわをつけなくても染まります。きちっと折った線をつけたいときは，くしゃくしゃにする必要はないです。折り染めの場合は，きれいな模様がつきますら，そのまま紙を折っていってもいいです。紙はいっぱいあるので，いろいろやってみましょう。」

「三角形や四角形に折ったものを割り箸ではさんでみる。そのときに斜めにはさむとおもしろいものができるかもしれません。はさんだら割り箸の端を輪ゴムでぐっとできるたけかたく締めます。締めたところが残って，広げたときに模様になってきれいです。これを板締め染め，または，交結染めといいます。もう一つ，丸めてもんだら輪ゴムで端をしぼってあげます。きつく輪ゴムを巻かないと染まってしまいます。長い時間液に浸しておいても染まってしまうので，ほどよく浸けたらすっと引き上げる。先だけつけてもいいですが，その加減はみなさんがどのように工夫するかです。基本的にしぼってあげれば大丈夫です。輪ゴムがきつくて後でとれないことがあるので，そのときは大学生の方に手伝っていただきます。」

「紹介したのは，三つあります。折り染め，板締め染め（交結染め），しぼり染めです。後は，要するに運を天にまかせる方法があります。きみたちもアーティストになった気持ちで，神様の力を借りて，運を天にまかせてにぎりしめたまま突っ込んでみる。しばらくぎゅぎゅっとつける。もしかしたらアーティストもびっくりするような芸術作品ができているかもしれない。このあたりを楽しんで下さい。そして，できたものを町並みに並べて飾ってみましょう。」

子どもたちは，紙を手にとって折りたたんたり，丸めてしわをつけたりして，早速染料につけ始めた。学校の染色を扱う授業であるならば，折り染めの技法について折る方法や手順をしっかりと伝えようとする。先生の示す方法で折っていくことによって，どの子どもの紙も一通りの模様で染まることになる。このワークショップでは多様な折り方や染め方を試みたので，広げたときの模様が変化にとんでいた。子どもたちはコツをつかむと，次々にいろいろな染め方を試みて，和紙の色や形の美しさを楽しんだ。

和紙を染めることは子ども一人ひとりの活動である。ところが，よく見てみると，ほとんどが初対面の子どもやスタッフであるにもかかわらず，相互にかかわっていることが理解できる。一人が個性的な表現をしたり美しい模様をつくると，鑑賞してよいところを学びとろうとする。軒下に並べていくと，自分の染めた作品だけでなく参加者の表現を見る。「いろいろな染め方があるね」「すごくきれい」と言う声があちこちから聞こえてくる。

その際に，個々の作品（染め）の効果だけでなく，並べられた作品全体，いわば共同作品を知ることになる。色の和紙の並びが風にゆらめいて動いている様子，光が当たってステンドグラスのように透けている様子など，いろいろな場面を鑑賞する。アーティストや大学生の支援スタッフも一緒になって染めたり作品を並べたりして，共に参加している状態であった。折ったりして染めるという活動は初心者でもできるし，海外のアーティストも興味をもっていくつも試みていた。サンディー・オッペンハイマーとエバ・ロシェック・ブシュコは，子どもたちの作品を何枚か提供してもらって自己の作品制作の糧にしようと試みていた。９月の晴天の日ということもあって，染められた和紙の色が鮮やかに見え，子どもたちが「町並みをかざる」というテーマと合致することができた。

５．路上でのコラボレーション３　－染め－

これまでの実践を参考にして，平成16年の夏に《染めて町並みをかざる》と《大きな画面に表現をする》といった活動の二つを再び実施することになった。まず午前中に染めを行い午後に町並みに和紙を敷いて大きな画面に描くことにした。

和紙を折ったり包み込んだりした後に，部分的に染料につけると，色が染み込んで模様になる。オリエンテーションで染め方をいくつか示した上で，子どもたちに正方形に近いを和紙を配布して，好みの色の染料で染めることにする。染料は，染め粉を水で溶かしたものを大きめの容器に入れて，路上のテーブルに置く。子どもたちが自分で色を選んだり染め方を工夫する。既に折り方を経験している子どもは，はりせん（アコーディオン）のように紙を折りたたんでいたが，多くの子どもは紙を丸

めてしわをつけて色が染み込みやすくした。

はじめは，どのように紙を折ったり包み込もうか，どの色の染料をつけようか，と幾分戸惑う様子があった。まわりの子どもたちが次々と紙を染料に入れるのを見たり，染めた紙を広げ出したのに誘われて染める活動が展開されていった。子どもたちが普段生活している学級と異なり，ワークショップの場合はそれぞれ学校・学年・学級が異なり，初対面の子が多数いる。ところが，一度造形活動が始まると，お互いに工夫をしようとしたり，一人が気づいたことが周囲に反映していったりして，共同での学びが成立してくる。

染料は容器に入れてあると色が濃く見えて，白色の和紙に染めたときにどの色になるのかわかりにくい。あらかじめ小さな和紙の断片を染めて色見本をつくっておく方法もあるが，今回はあえて子どもが色を見つけだしていくようにした。しわをよせて包み込んだ和紙の先端に一つの色を染めて，さらにもうひとつの先端をつくって別の色を染めてみるといった具合である。途中で染まった色や模様を確かめる様子も見られた。子どもたちは，無意識のうちにお互いの色の調子や染め方を交流している。染める活動の特徴は，染めているときの予想と実際に紙を広げたときにできるた模様とが一致しないことである。広げてみたときの意外性が魅力にもなっている。「広げてみないとわからないよ。どんな作品になるのか」とスタッフの発した言葉は的を射ている。奇麗なものや，個性的な染め方をした子どもには，支援スタッフ（指導者や学生）が「おもしろいね」「きれいだなあ」「すごい」「これはいいね」といった言葉がけをして評価する。とくに考えもなく偶然に染めたものでも，ダイナミックな感じがあったり，形に変化があったりして思わぬ効果が出ることがある。

話を聞いている間はそわそわとしていた子どもでも，染める方法を理解すると活動に夢中になる。同じ色で一様に染めるよりも，四隅が模様になるように形を工夫したり，別の色を加えていったりして，それぞれに工夫しようとしていた。自分なりに一枚の紙を染め終わると広げて友達に示し合う。同じような色合いであっても折り方を変えると，横縞模様になったり，円形の模様になったりする。そのような工夫や発見をお互いに鑑賞しあう場面も見られた。

図９．折ったり丸めたりした紙を染める。

図10．染めた和紙を並べてかざる。

染め上がった作品は，軒下にはった紐に洗濯ばさみでとめて乾燥させる。様々な色が並んだり組合わさり，一人ひとりの作品があたかも共同作品に展開していく。染めているときには自分の作品しか意識しなかったけれども，軒下にどんどん並べていくうちに，いろいろな表現があることが理解できたり，隣り合う色や模様がリズムやハーモニーを生み出すことを知る。どのようにすると美しい染め方になるかを鑑賞を通して考えたり，１枚目とは異なる表現方法に挑戦しようとしたりして，子どもたちの意欲は次第に高まっていった。

数多くの支援スタッフがいたが，染めを経験しているスタッフはむしろ少数である。子どもたちの

意欲的な様子に触発されて，学生や教諭も一緒になって染めをする姿が見られた。スタッフは見ているだけでなく子どもたちと一緒に活動して楽しむことが大切である。

染めた作品が１軒の軒下から町並みへと広がるにつれて，普段見慣れた景色が異なって見える。けれども，いろいろな和紙を染めた紙が並んでいる光景は違和感があるのではなく，色紙ということもあってうだつの上がる町並みに馴染んでる印象を受ける。

多くの紙を裁断して配布する，染料の容器をいくつも並べる，町並みの軒下に物干し用のひもをはりめぐらす，作品を次々と洗濯ばさみでとめていく，といった準備や展開は，一人で担当できるものではない。学生，現職の教諭，市の職員，地域のボランティアをはじめとした多くの支援スタッフがいて，うだつの町並みという環境だからこそできる活動である。造形活動にかかわる人々の輪の広がりがあることが，ワークショップを行う意味にもなっている。

６．路上でのコラボレーション４　－「絵と書のコラボレーション」－

絵と書は芸術表現であり，大きな紙の画面に筆で思い切って表現する活動において，前衛的な書と絵画との共通点が多い。ところが，絵は図工や美術，書は国語や書写の時間に行うように異なった扱いをされがちである。このワークショップでは，自分のイメージに即した書の表現をすることで，絵と書の相互作用をもたらすことねらっている。

一般的な書の学習では横にお手本をおいて，それを書き写すことが行われている。既にもとになるものがあるために何を書くのかということで戸惑うことはない。けれども，造形表現や自己表現という観点からすると，感じたものを自分なりの方法で表現することが求められる。どんな文字や言葉にするのか，いかなる筆づかいを選択するのかといったことを試行錯誤することで，自己表現に近づけていく。

前衛的な書表現の中で関谷義道の書に以前から触れる機会があり着目していた。関谷義道は長らく岐阜大学附属学校に勤務していた関係から，附属中学校に多くの作品が寄贈されている。玄関や研修室には作品展示のスペースがあり，研究授業や教育実習のおりに作品を鑑賞できる。人生を象徴するような言葉が選択され，その言葉のもつ印象にそった筆跡が選択されている[9]。関谷は附属学校在職中に，現在日本を代表するアーティストとして活躍している日比野克彦を教えている。日比野は附属小学校のときに関谷に評価されたことが美術の世界に関心をもつきっかけになったと述べている[10]。小学校時代に日比野が自分の思いのままに筆を動かして書いた作品を関谷に褒められことが自信につながり，自分の感じたままに表現することの大切さを知ったと言う。

近年，関谷を中心にした書のグループは，夏休み期間中に岐阜県美術館において子どもたちに「自分の書づくり」というワークショップを行っている。この機会に磯部と岐阜大学の美術教育講座の学生も書のワークショップに参加して，書づくりの体験をしたり関谷から助言を受けた。その体験と交流が，美濃市での「絵と書のコラボレーション」のきっかけになっている。当初，関谷から美濃市でのワークショップへの参加の承諾をいただいたが，直前に体調をくずされ関谷と親しい安藤，後藤のお二人が担当して下さることになった。

平成16年８月21日（土）の午後に「絵と書のコラボレーション」というタイトルで実施することになった。ワークショップの会場は，うだつの上がる町並みにあたる美濃市泉町であり，この通りには国の重要文化財に指定された旧今井家住宅がある。1.5m程の幅があるロールの和紙を使って，広げると150m程の大きな画面ができるようにする。和紙は墨や絵の具をよく吸い込んでしかも簡単には破れない材質のものにする。画面からはみ出して路上に絵の具や墨が飛ぶことになるので，今回も栽培用のロール状になった幅広のビニールを下敷きのかわりに敷く。

描く用具は，いろいろな線が描けるように太さや長さの異なる刷毛を150本程準備する。大きな画

面に自在に描くことをねらいとしていることから幅が３ｃｍ以上の刷毛にして，線を描いたり色を塗ったりできるようにした。絵の具は，多くの絵の具が必要なので，大きなチューブ入りのポスターカラー（12色セット）を10箱揃え，セットに入っていないけれども子どもたちが好む色，たとえば水色・桃色なども用意した。バケツに絵の具をほどよく水でといて入れ，それを子どもたちが個々に使えるようにコップに分ける。色がわかりやすいようにバケツやコップを透明か半透明のものにした。

うだつの上がる町並みは市の中心部のため，参加者だけでなく多くの人々に見ていただくという点では好都合であるが，生活の場でもあるので地元の自治会を通して趣旨説明をして理解と協力を得る必要がある。警察には車両通行止め（歩行者天国）の申請をした。市制50周年記念事業における子どもたちの行事であるので，各方面の大きな協力を得ることができた。美濃市では「あかりアート展」や「町家回廊」など市民参加型の美術イベントが毎年行われていることから協力的である。

吉田工房の土間に子どもたちを集めて，午後の内容について伝えることにした。絵を描いている人と書をしている人が今日は一緒になって活動をすることを伝え，書道家の二人（安藤・後藤）と画家の二人（磯部・佐部利）を紹介する。佐部利典彦は岐阜での活動を中心に絵の具のテクスチュアを生かした絵画作品を制作するとともに，モンゴルとの美術を通した国際交流をしたり，子どもたちを対象にしたワークショップを横浜などで開催している。

まず，磯部が「午前中は紙に色を染めたね。今度は二つのことをします。ここに100m余りの白い和紙が２本敷いてあります。あちら側の白い紙には字を書きます。これを書道というね。今日の習字はいつも学校でやっている習字とはちょっと違います。こちら側の紙は色を使います。自分の好きな色や自分の好きな形を描きます。今日は文字を書くことと絵を描くことと二つやります。」と述べた。両方経験することを伝えながら，おおよそ同じ人数になるように２グループに分かれて活動を始めることにした。半分は字を書きもう半分は絵を描き，後で入れ替わって両方経験することになる。

書道家の二人と画家の二人が２つの画面に分かれて造形行為をはじめる。字を書くのと絵を描くこととどんな点が違うのかに着目することにした。「かぜ」と「はな」を表現することを伝え，子どもたちやスタッフは書いたり描いたりする姿が見える路上の場所に移動する。ただし絵の具が飛び散ったりするので，３ｍくらい離れた場所で見ることにした。

子どもたちは何が始まるのか興味深く見つめていたが，磯部が白い画面に思い切って絵の具をつけると次々に「あー」という驚きの声があがった。磯部は水色の絵の具をしたたらせながらアクションペインティングを始め，佐部利は大きな刷毛に朱色をつけて円い形を繰り返し描いた。しだいに二人の描いた後が交わり，水色と朱色とが合わさって見えてきた。佐部利は筆で描くことに加えてドレッシング用の容器に詰めた絵の具を画面に飛ばし始めた。勢いよく絵の具が飛び散ったので再び「あー」という声が上がった。磯部は紺色に変え佐分利は黄色も使ってのびのびと描いていく。

一方，安藤と後藤は太い毛筆で体全体を使いながら漢字で「花」と「風」と書いた。安藤は「花には春の花，夏の花，秋，冬いろいろあるね。それからたくましく咲いているのとやさしい花もありまが，この花はぱっと咲いて精一杯咲いてわたしは花盛りですよと，そういう花を書いてみました」と述べた。後藤は「風にもいろいろな風がありますね。そよ風もあれば冬の冷たい北風もあります。台風のときもあるね。風にもいろいろな風があります。ここに書いた風はどうですか。やっぱり風が吹いているね。それぞれの気持ちを考えて書く。自分流，オレ流って今はやりですね。世界でひとつしかない表現になるように頑張って下さい」と語った。佐部利は「スマップの歌に世界に一つ花というのがあったね。世界の一つだけの大きい花や小さい花をかきました。みんなも元気に描きましょう。」と述べた。磯部は「風を書きました。風を描きました。ここに来て夏の風が吹いてきました。肌に感じました。そんな風を表現してみました。みんなでかいてみましょう」と呼びかけた。

子どもたちに「かきたい人」と問いかけると「はい」という声とともに一斉に手が上がった。「今は花や風の印象をかいたけれども，みんなが出したい色，出したい形を素直に表現してみよう。この

白い画面をいっぱい使ってもいいです。みんなが使った染め粉（染料）やいろいろな色のポスターカラーもあるよ。ローラーでもかけるかもしれない，筆でもかけるかもしれない。考えて使ってみましょう。」と言い加えた。

「これからジャンボ筆で自分の書きたい言葉，何でもいい。一年生の子は，学校で習った字でもよいし，ひらがなでもよい。学校で鉛筆とかで書いている字ははっきりと目的がある。それは字を間違えないように，そして，だれでも読めるようにきちっとしたかたちの字をかきましょうという目的になっている。今日書くのは，正しく書くけれども後はきちっと書かなくて自分の思うように元気よく，かたちがくずれてもよい。筆のもち方は，太い筆なので，小さい子はにぎるのも大変かもしれないが，のびのびと書きます。」「もっとたくましい心のもち主になりたいと思ったら心，長良川の川のようにさっと流れるような感じだったら川，緑がいっぱい茂っている山だったらのびのびと山，花もいろいろ。ああ今日は楽しかった，ジャンボ筆で作品が書けたという思い出をつくって下さい。」と安藤が説明をした。

図11．画家が絵を描く様子を見つめる。

図12．書道家の説明を理解する。

図13．子どもたちが絵の具で表現する。

図14．子どもたちが太い毛筆で書を表現する。

磯部は「このうだつの上がる町並みというのは，とっても大切な所です。これは日本の中でもとっても重要な場所なのです。その重要な場所でやれることは，ものすごいことなのです。絵の中はのびのびと自由です。君たちも思いっきり絵を描いたり字を書いたりして下さい。自由です。だけど，そこから外はみんなのものです。重要文化財です。」と留意を促した。

時間をとって一つのグループはいろいろな色の絵の具を使って描き，もう一つのグループは墨で文

字を書く活動を行う。並行する２本の和紙にそれぞれ絵と書が表現されていくことになる。ただし，画面は150ｍほどの長いものであるので，一ケ所にかたまらないように間隔を空けて始めることにした。子どもたちが小学校で描く場合には，通常四つ切り画用紙の中におさめることに気をつける。書の場合も同様に定形の書道用紙の枠内での表現で，体全体を使って繰り返し表現をする経験はほとんどない。そのため，当初は片隅に幾分小さく描いたり書いたりする子どもが多かったが，しだいにリラックス雰囲気になり，白い大きな画面に自在に描くことを楽しんでいる様子であった。

一通り画面がうまりかけてきたタイミングをみて，磯部はいったん子どもたちの造形行為を止めて，説明を加えた。「今度は，字と絵と一緒にしたらどうなるのかということをやってみたいと思います。」「またテーマは同じで『はな』と『かぜ』です。書の作品の上に絵をかいてみます。絵の作品の上に書をかいてみます。」と語った。

画家の磯部と佐部利は「風」や「花」と墨で書かれた上に装飾的な模様を描いたり，はけで色をつける。安藤と後藤は，いろいろな色で染まった和紙の画面を下地にするようにして改めて墨で「風」や「花」を文字を書く。同じ素材であるが重ね合わせる順序をかえることによって，２本の和紙の画面は異なる趣を示す。墨の黒さと様々な色の絵の具とがそれぞれ引き立たせあって，子どもたちも色や形の魅力を鑑賞していた。書（墨）の上に絵（色）を重ねたり，絵（色）の上に書（墨）を重ねるという行為は，おそらく画家や書道家の４人にとっても慣れないことであったはずであるが，それだけに活動に集中していた。でたらめに重ねているのではなく，既に表現されている墨や絵の具の筆跡やにじみを生かしたり余白の効果を瞬時に把握しているのが理解できた。書や絵としてそれぞれ表現された上に重ね合わせていく行為は，幾分勇気がいることであるが，４人の行為や画面の変化を見ているうちに，「絵と書のコラボレーション」の造形的なおもしろさを感受し，子どもたちも一緒に絵と書の魅力を体験した。

図15.　絵に書を重ねる。絵から書へ。

図16.　２つのコラボレーションの作品が並ぶ。

子どもたちの活動を見ていて，安藤は「とってものびのびと楽しくやっていた。それは大変良かった。３歳の小さな子でも頑張って絵とか書をかいていた。今日は形を気にしないでのびのびと自分の字を書く。それが本当の自分の作品になる。お手本があってそれを真似して書く作品は，もの真似の作品になる。自分の作品は自分で創る，そういう経験もとても大切である。今日は大変暑い中でしたが，最後までがんばってやりました。」と語り，佐部利は「みんな元気やったね。この元気があったら何でもできるぞ。でもね佐部利さんもみんなの元気に負けずに頑張るで，みんなもいろいろと頑張ってね。また会いましょう。みんな最初はおもしろいだけでかいていたかもしれないけど，よく見ると，あらここきれだなあ，こんなところ花が咲いてるなあとか，お友達がかいたところを見てぼくもそこんところをかいたらどうかなあとか，友達の様子もよく見てやっていてよかった。」と述べた。そし

て，磯部は次のような話を続けた。「この活動ができるには，この４人の先生だけではないんですね。みんなが絵を描けて字を書けたというのは，このために助けて下さった人がいるからです，美濃市の職員さんや学校の先生や，地域の人やおとうさんやおかあさんや，活動しているときにふいてくれたり洗ったりしてくれたりしている人を見ました。通行止めにして絵をかくために100ｍもの紙をひかしてくれるところは，日本には他にありません。私は東京とか外国とかいろいろなところでワークショップをやってきましたけど，こんなふうにして一番大事にしているところを通行止めにして，のびのびとやらしてもられるところはありません。それは，みんなが住んでいる町の市役所の人や地域の人や文化会館の人のおかげです。それから岐阜大学の先生や学生が準備してくれているおかげです。ずっと前の日から準備をやっていてくれます。そういう人の力があって私たちと皆さんの楽しい時間があったのですね。そこに本当に感謝したいと思います。皆さん自身がのびのびとすばらしい色と形や字を表せました。この歴史のある自分の住んでる所で活動しました。今それはこの一瞬かもしれないんだけど，ずっと生きていく中でとっても心にのこる一瞬になるはずです。この貴重な一瞬を大切にしましょう。お互いの一緒にできたことを感謝しましょう。」「せっかくなので，最後にもう一度眺めて，きれいな色や文字を見ましょう。」

夏の暑い中での屋外での活動であったが，子どもたちは精力的に活動し，町並みの中で和紙の上に絵と書を共に表現することを体験した。

７．まとめ

本稿では，子どもたちをはじめいろいろな人々が共に造形活動をすることを通して広がりの輪をつくっていくという意味でコラボレーションという言葉を用いた。コラボレーションは一見すると従来から学校の図工・美術科で行われている共同製作に似ている。ただし，共同製作の場合には，卒業記念作品の共同製作に示されているように，作品づくりに重点が置かれる傾向がある。指導者の意図する完成作品のイメージ（全体計画）が先にあって，そのパーツを子どもが分担していく。コラボレーションの場合には，そこに集まった人々がいろいろな発想・工夫を出し合うことを目的としている。そのため，発想が一つにまとまらなく広がっていくことがあるし，最終的に作品が残らないときもある。活動の過程において共に創り出す楽しさや取り組みに重点を置こうとしている。

上野行一は，教育において横断的・学際的な学習が取り入れられ，美術の世界でも新たな表現方法が見られ，人々と対話や協力をして制作をする試みが行われてることを指摘している。枠組を柔軟にして共生や共創の思想を定着させることが多くの分野で行われているとし，美術教育においても共創的な授業，共生的な評価，美術の形式・素材・手法の変動，コラボレーションとしての美術の導入を進めることを示唆している[11]。

コラボレーションは，これまであった人間関係，美術や教育の枠組を柔軟にして共に学び，共に創り上げていく動向や理念を示しているように考えられ，「造形コラボレーション」についても多様な可能性や展開を探る必要がでてきている。

美濃市は伝統や自然環境に恵まれているものの，人口約２万６千人程の小さな都市であり，少子化による学校の再編も行われている。小規模校では一人ひとりの子どもの個性に応じた教育ができるという利点があるが，学習効果や社会性において課題が指摘されている。慣れ親しんだ特定の子ども同士が長年にわたって生活をするので，大きな集団の中で切磋琢磨するとか，いろいろな人々と交流をする機会が乏しいことが指摘されている。ワークショップでは，学校・学年・学級の枠をはずして行われることが多いし，子どもや地域の人々が輪を広げながら共に活動を行うこと（コラボレーション）を目的している。「ワークショップを積極的にするようになってから，子どもたちが大人や仲間に気軽に声を掛け合うようになってきた」という教育関係者の意見もいただいた。ワークショップやコラ

ボレーションの手法を子どもたちの学習に取り入れることによって，地域のもつ教育課題を解決する糸口が見いだされ，子どもたちが生きていく上で必要な力を培うことができるはずである。教育の成果は実践の蓄積によって生まれるので，造形コラボレーシュンを継続し，子どもたちの実態の変容を見つめていきたい。

注

1）ワークショップは，芸術活動，まちづくり，学校教育，心理学，自然体験などのさまざまな場で広がっている参加体験型の学び方である。「一方的に話を聞くのではなく，参加者が主体的に議論に参加したり，言葉だけでなくからだやこころを使って体験したり，相互に刺激しあい学びあう，グループによる学びと創造の方法」という。中野民夫『ワークショップ－新しい学びと創造の場－』 岩波書店　2001年を参照。

2）美術館や社会教育施設で子どもたちを対象にしたワークショップをする場合に，十分に内容を紹介するだけの期間や紙面がないときに「子どもワークショップ」という表題だけを示して参加者を募る。参加者にはワークショップの意味や内容が既にイメージできているらしく，具体的な内容を知ってズレを感じる子どもや父兄は近年は見当たらない。

3）美濃市の文化については，内木茂（元上牧小学校長）『わが郷土－美濃市の歴史と文化財－』（生涯教育講座用自作テキスト）にわかりやすく示されている。

4）美濃紙の沿革については，澤村守『美濃紙－その歴史と展開－』木耳社 1983年，美濃紙の紹介に関しては，美濃市の関係者が作成した教材ビデオ「美濃紙のできるまで」「美濃紙の道具づくり」「美濃紙の誕生」などを参照。

5）国内外のアーティスト・イン・レジデンスの状況は，『美術手帖』1993年３月号に特集として紹介されている。

6）アーティスト・イン・レジデンス「美濃・紙の芸術村」実行委員会（石川道政委員長）は，平成15年度第19回国際交流基金地域交流振興賞を受賞している。それに際する国際交流基金の資料より引用。

7）磯部錦司（宝仙学園短期大学助教授）は，かつて美術科の教諭として中学生を精力的に指導するとともに，個展やグループ展を中心に作品を発表してきた。和紙や墨といった素材を用いて，自然や風土から受けるイメージを抽象的に表現している。

8）磯部の花園小学校（東京都新宿区）での実践をきっかけとして，平成13年５月に岐阜大学附属小学校で実施した。学級担任で図工科を専門とする家田陽介（現西濃教育振興事務所），アーティストの磯部，大学教員の辻がティームティーチングを行う。体育館での活動には，アーティストの金子典栄や岐阜大学の美術教育講座の学生たちもコラボレーションに加わった。花園小学校と岐阜大学附属小学校の実践内容については，辻泰秀　磯部錦司「子ども・作家・教師・学生たちのコラボレーション－『できごと』を生み出す相互作用－」（美育文化　2001年７月号）を参照。

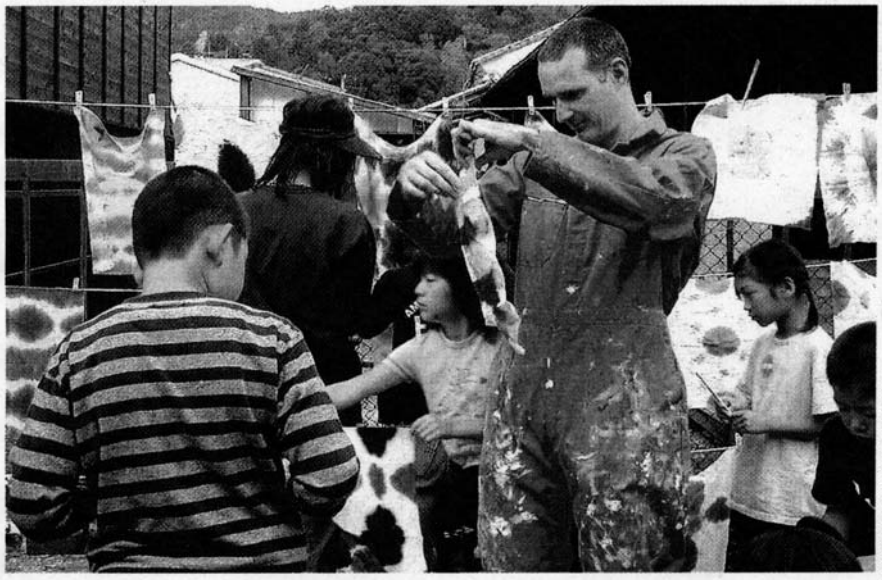
9）関谷義道は，岐阜県に生まれ，墨人会を中心に活動し，ニューヨーク近代美術展をはじめ欧米でも作品を発表する。岐阜大学附属中学校副校長を務めるなど教育においても功績がある。辻太・篠田桃紅（本籍岐阜市）をはじめ岐阜にゆかりのある前衛的な書道家や墨象芸術家は多い。

10）日比野克彦（現在，東京芸術大学助教授）は，ダンボールを素材としたオブジェやダイナミックなイラストの制作で著名であり，図工・美術科の教科書にもいくつかの作品が記載されている。ＮＨＫ「課外授業ようこそ先輩」に際して，岐阜大学附属小学校で「見えないものが見えてきた」というテーマで実践を行った。その番組の中で，関谷義道から学んだことを紹介している。

11）上野行一 「コラボレーションとしての美術教育」 花篤實 『美術教育の課題と展望』 建帛社 2000年 pp.87-94

謝　辞

美濃市での造形ワークショップの開催に際してお世話になりました石川道政市長・後藤正之教育長をはじめ美濃市の職員の皆様，学校教職員・美術教育関係者・市民ボランティアの方々に厚謝申し上げます。海外アーティストの招聘については，国際交流基金及び美濃市文化会館（美濃市のレジデンスの事務局）の尽力によります。記して感謝いたします。



染色した和紙の出来栄えを見る芸術家と児童＝美濃市泉町、紙の芸術村工房

海外芸術家５人と美濃市の児童

和紙染めで交流

「紙の芸術村」ワークショップ

独創性 互いを刺激

海外の芸術家が美濃和紙を使って創作活動する「アーティスト・イン・レジデンス　紙の芸術村」事業で、美濃市を訪れている芸術家と小学生が交流するワークショップが二十三日、同市泉町の紙の芸術村工房で行われた。（舌間隆博）

イスラエルやアメリカなどの芸術家五人と岐阜大学教育学部の学生、市内の小学生ら八十五人が参加し、和紙染め作業に挑戦。

児童らは和紙を丸めたり、一部に輪ゴムを巻くなど趣向を凝らして染色した。染めた和紙はうだつの上がる町並みで干し、町並みを鮮やかに彩った。

子どもの独創的な作品に感動し、「作品を一枚ほしい」と申し出る芸術家もいた。児童たちは「言葉は分からないけど、芸術家がほめてくれた」と喜んでいた。

資料１．　町並みでの「染め」の関連記事
2003（平成15年）年９月25日（木）　岐阜新聞　中濃版